

- 1 派遣期日 平成29年8月28日(月)
- 2 研修先 学校名(会場名) 筑波大学附属小学校 講堂
所在地 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>
- 3 研修内容

テーマ：考え、議論する道徳シンポジウム
～主体的・対話的で深い学びを実現する！～

(1) 問題解決的な学習で創る道徳授業の実践発表と提案授業

① 実践発表

○木村 隆史先生(豊島区立豊成小学校教諭)

教材「人間愛の金メダル」について、自我関与が中心の学習・問題解決的な学習・体験的な学習の3つの指導法の比較を行った。

問題解決的な学習を中心においた指導では、資料を読み、自分であったらどうするかを4つの意見から意思表示し、3・4人のグループで話し合い、代表意見を板書する。教師は価値に迫るため、それぞれの意見を意図しながら取り上げる。児童は聞きながら、途中で意見を変えることで他者理解の心情が育っていく。また、中心人物ではない立場から考えさせる場面を設定することで、児童の多面的・多角的な判断力を養うことができる。

○山田 貞二先生(一宮市立浅井中学校校長)

問題解決的な学習の良さは、「自分事になる」「実感的な問いがもてる」ことから、現代的な課題である「LGBT」を取り上げ、中村中氏をゲストティーチャーに迎え、より現実的な話し合いを目指した。

問いを出させる上では、4人グループで付箋に「LGBT」についての疑問を書き、模造紙の上でカテゴリ化することで視覚化できるようにした。実際にゲストティーチャーの体験を聞くことで、中心発問である「カミングアウトについて」思考のずれが生じ、「言わない」「言う」の二項対立の話し合いを活発に行うことができた。

② 提案授業(2年生) 授業者：幸阪 創平先生(杉並区立浜田山小学校教諭)

○導入では、雑談からおにごっこのお話へつなげ、年下でかつ交通事故に遭っている子という加減をしてあげる必要がある相手を、自分だったら「入れる」か「入れない」かペアで話し合う。

課題解決場面では、教材「公園のおにごっこ」の前半のみを読み、「加減が必要な相手を審判にする」という解決が「いいこと」か「悪いことか」話し合い、審判にすることはやさしい行動だと児童の考えがまとまっていく。さらに、役割演技を行うことで、もし自分であったらどうするか考えをもたせ、意見を板書してそれぞれの考えには「みんなが楽しく遊べる」という共通点があることに気づかせる。

ここで、教材の後半を読み、「加減が必要な相手も入れて、日が暮れるまで遊ぶ」という結末について話し合う。加減が必要な相手の立場から問い返しをすることで、児童の考えが「みんなが楽しく遊ぶためには、手加減をしないことも大切」というものに変容していった。教材の「きもちがスッキリした」という言葉について話し合い、みんなが同じルールでできて、スッキリしたという気持ちからだろうというようにまとめていった。

終末では、「この授業で大事なことは何か」「似たような経験はあるか」について、自分の考えをワークシートにまとめた。児童からは、「人の意見をちゃんと聞いてあげる」「人の気持ちを考えて教えてあげる」「自由にやらせてあげる」ことが大事だという意見が出た。

③ 研究協議 助言者：柳沼 良太先生(岐阜大学大学院准教授)

○子どもが変容したと言えるのか。最初から、子どもは分かっていたことなのではないか。

→相手にとっての思いやりとは何なのか考えることをねらいとしていた。

○思いやりが行動化されたものが親切であるが、教材の前半部は行動が良くなかったという、相

手の気持ちや立場を理解して行動を考える授業になっていた。

→「～してあげる」という上から目線の発言が多かった。対等であるという感覚を育てていきたい。

○教材の後半部分を取り入れなくてもよかったのでは。

→一つの選択として教材の結末の良さも考えて欲しかった。

○子どもたちの問題になりやすい教材にするべき。

→道徳的ではない本音を引き出すためには、より切実な問題のほうが良かった。

(2) 基調講演とシンポジウム

① 基調講演「考え、議論する道徳」への質的転換

小野 賢志氏（文部科学省初等中等教育局教育課程課 主任学校教育官・道徳教育調査官）

○指導要領改訂の背景として、「いじめ」「地域・家庭の変化」「情報モラル」「諸外国と比べた自己肯定感の低さ」「世界が向かっている方向の変化（社会的摂理・共通価値の尊重）」がある。

○人工知能が進化している一方、人間に求められていることとは答えのない人生において、納得できるよりよい生き方（納得解を得ること）ができることである。

○これまでの道徳教育は量的・質的に問題があり、「考え、議論する道徳」へ変換することが必要である。道徳の学習を通し、生き方についての考えを深める中で道徳性を養うことを目標とする。道徳的諸価値を理解する手段として、「自分事として考える」「友だちの意見も理解する」という学習過程も明示している。

○問題解決的な学習では、自分との葛藤を通して学びに向かう力や人間性の育成を図ることができる。評価については、指導要録に記録することで継続的に把握し、指導に生かしていく。

② シンポジウム 「考え、議論する道徳」を実現するには

○道徳的諸価値の押しつけを恐れる余り、多様性ばかりが強調されてはいけない。納得できる話し合いができるようになるためには、学級のコミュニケーション力を成長させることも大切になりたい。生徒指導とも同じで、一緒に生活していく場を押し上げていくことで、社会的な側面や道徳性も育っていく。

○生き方を伝えられる授業は道徳だけであり、その自由度は教科化されても変わらないで欲しい。アクティブ・ラーニングと称して、4人で話し合っているからよいという形のみで終わらないで欲しい。道徳は、現代的な問題を扱い「must（やらなければいけない）よりも want（やりたい）」時間にしていきたい。

○評価については、内容項目ごとや道徳的諸価値ごとにするものではない。「～を理解しなければならぬ」という姿勢ではなく、子どもたちの間で価値を広げられたかを大事にしていきたい。子どもたちが希望をもてる評価にしていきたい。記述の例示はないので、先生方が工夫していく必要がある。一時間一時間の評価は必要である。

4 感想

道徳の教科化に向けて、「考え、議論する道徳」へ質的に変換していくとはどのようなことなのだろうと考え、今回の視察を行った。

問題解決的な学習を中心とした実践事例や提案授業を通して、他教科でも行われているように自分の意見を持ち、小グループで話し合うという、主体的・対話的で深い学びを主体とした指導方法を用いていく必要性を感じた。一方で、問題解決場面については必要性を持たせるようなものを設定しなければ、本気で考えて議論することは難しく、道徳的なことを発言しただけで終わってしまうと考えられた。山田貞二先生の実践発表で、p4c という考え方を紹介されていた。p4c とは「philosophy for children」の略であり、直訳すると「子どもの哲学」という。子どもに問いを出させることで、自分事で考えられる道徳が行えるということだった。もちろん、問いがもてるように練習する必要もあり、決して簡単なことではないが、教科化する道徳においてチャレンジ精神を感じられた。また、提案授業の中で、「問い返し」「焦点化」「ほめ言葉」「言い換えさせる」「共有化」などの技術を具体的に理解することができた。

今後も実践を積み重ね、児童の「want（やりたい）」を引き出せるような道徳の指導ができるよう研究していきたい。